

平成29年度 国際交流委員会 活動報告 2

平成29年度国際交流委員会 国際交流事業 国立モンゴル医科大学看護学部との交流拡充のための視察

名古屋市立大学看護学部

山口 知香枝, 嶋田 理佳, 金子 典代
脇本 寛子, 樋口 倫代

名古屋市立大学は、2014年3月に国立モンゴル医科大学と大学間交流協定を締結している。看護学部でも、学生交流プログラムをはじめとして教員間の共同研究の推進を行うべく、その具体的な日程や内容、方法についての話し合いを行う方針である。

そのために、9月27日から30日にかけて視察を行ったので、その概要を下記に報告する。

I 国立モンゴル医科大学看護学部との

交流の実績

名古屋市立大学は、2015年3月に国立モンゴル医科大学と大学間交流協定を締結した。看護学部としては、2015年に国際交流委員会の金子典代准教授が国立モンゴル医科大学看護学科を訪問し、本学との強い交流開始への希望を確認した。2016年11月には、本学が国立モンゴル医科大学看護学部教員2名を招へいし、日本の看護、保健医療について視察機会を提供すると同時に、セミナー・講義を通じて教員間交流の推進を図った。

今回は、次年度より実施する予定の国立モンゴル医科大学看護学部との短期留学プログラムの具体的な内容等について話し合うとともに、学生がモンゴルに留学した際の経験可能なプログラムと滞在先の確認を行うために、9月27日から30日にかけて山口講師と嶋田准教授がモンゴルへ赴き視察を行った。

II 目 的

1. 学生間の国際交流

名古屋市立大学看護学部、国立モンゴル医科大学看護学部の相互の学生の交換研修を通じて、相互の国の看護や公衆衛生活動に関する知識を深めること、異文化コミュニケーション能力を向上させることを目的としている。交流を通じて、将来的にはモンゴルの優秀な国費留学生を受け入れる基盤を整えることも視野に入れている。

2. 研究者間の国際共同研究

名古屋市立大学看護学部が、国立モンゴル医科大学看護学部を含むモンゴル国内の研究機関との共同研究の推

進を実現することである。今回の訪問では、本学の教員の関心領域（母子保健等）に関する研究課題について領域が近い教員と協働できる可能性を模索する。

III 視察プログラム

日付	内容	
9/27 (Wed)	14:40 19:10	Leave from Narita International Airport Arrive at Chinggis Khaan International Airport
9/28 (Thu)	09:00 10:00	Meeting with Dr. S.Delgermaa Introducing MNUMS School of Nursing and meet faculty staff
	12:00-13:00	Introduce about School of Nursing at Nagoya City University for MNUMS students
	13:30-14:30	Lunch meeting
	14:30-15:30	Consultation about nursing education curriculum with faculties of fundamental nursing
9/29 (Fri)	16:00-17:30	Meeting with Dr. Narula at Zoring Foundation
	09:00 09:40	Meeting with Dr.L.Khishigdelger Meeting with Dr.N.Naranbaatar,dean to talk about academic exchange program (relevant faculty members are invited to participate in this meeting)
	10:00-12:00	Visit the university hospital and health centers in the community
	15:00-17:00	Meeting with Dr. Narula at Zoring Foundation
	17:00-18:00	Meeting with NGO Staff and reserchers.
9/30 (Sat)	08:45	Leave from Chinggis Khaan International Airport
	17:50	Arrive at Narita International Airport

IV モンゴルの看護について

1. 病院の様子

大学附属病院が建設中であったために、ウランバートル市内で最も大きな病院の一つである Maternity and Child Health Hospital を見学した。医療機器は比較的新しいものが使用されているが、建物とベッドなどの備品は旧式である。日本ならディスプレイの器材でも、ここではディスプレイの器材は少なく、多くは消毒

して再使用するタイプの器材が使用されている。プライバシーに関する意識は低く、病室内が廊下から見えるような構造であったり、子ども同士が同じベッドで休んだりしている場面も見られた。

ここは学生の見学や実習参加も可能であることが確認できた。今後の発展が期待される国のなかで多い疾患や提供される看護のありようを学び、日本の最先端の医学とその看護との共通点や相違点を学ぶには、大変興味深い施設である。

2. コミュニティにおける公衆衛生活動

Dr. Narula による情報提供により、モンゴル国内で求められる公衆衛生活動について知ることができた。

ウランバートル都心部は、大気汚染がひどく車が多いために常に渋滞している。MNUMS では、成人向けの公衆衛生看護活動としてフラッシュモブ（ダンス）を取り入れたエクササイズを行っている。

郊外は、衛生状態が悪く、飲用水と下水道の区別が曖昧な地域もあり、乳幼児は未だ感染症で命を落とすことも多い。

V 国立モンゴル医科大学看護学部の看護学教育について

1. 看護学部のコースについて

看護師、助産師、理学療法士、作業療法士、放射線診療技師のコースがある。助産師コースは助産師資格取得のための4年間の専門コースで年間20名程度養成する。看護について4単位修得するが、看護師の免許は取得できない。

学生数は、看護学部生は1,200名で、うち1,000名が看護学科である。1学年は300名程度で今年は500名が卒業した。

看護の専門分野：公衆衛生看護、高齢者、小児、成人、基礎である。一方、教員は半数が医師である。ただし、モンゴルでは看護師の経験を経て医師になるコースもある。医師などが看護教員になるためには、特別に看護についての講習を受け就任する。

2. 看護学部の教育について

技術ラボ（実習室）は2008年にオープンした。専任の技師が2名常駐し、保安全管理、物品管理、シミュレーターの設定等を行っている。実際の授業は教員が実施する。

カリキュラム全体が未完成の状況で、教員が教授方法や授業構成を模索している段階である。本学にカリキュラム構成や授業内容についての情報提供をしてほしいという要望があった。看護技術は「Millerのピラミッド」を活用して評価している。

3. 学事日程について

新年度は9月に開講する。5月は定期試験がある。7-

8月は夏休みで、学生教員共に郊外に帰省するために不在にしていることが多い。

学事日程と気候を考えると、学生交流プログラムは9月前後が妥当ではないかと考えられる。

V 学生交流プログラムと今後の展望

学部長である Dr. Naranbaatar との話し合いで、今後プログラムを推進していくことで合意を得た。

1. 本学学生の国立モンゴル医科大学への派遣について

訪問時期は7-8月以外（夏休み）であればいつでも可能である。滞在期間は、学生であれば1-2週間くらい、教員は1週間くらいで、受け入れ可能人数は学生3名（学部生、院生とも可）、教員は1名である。教員は基礎看護学、小児看護学の教員をという希望があった。

プログラムの内容について、学生には授業参加、病院見学が可能である。教員は講義、演習、実習の組み立てや展開についてディスカッションをしたいという希望があった。

プログラム中は大学寮に滞在できる。寮は大学から約4km離れたところにあり、大使館や政府関連の施設が多くある地域である。治安は問題なさそうである。滞在中のバス代・タクシー代（プリペイドタクシー）については準備してもらえる。

その他、食事やホームステイ先なども必要に応じて準備できるとのことであった。言語はモンゴル語、日本語可能な学生・教員が多くおり、問題ない。

2. 国立モンゴル医科大学学生の本学への派遣について

Dr. Naranbaatar より、派遣時期はいつでも可能であり、期間は1週間かそれ以上でもよいというご意見だった。人数は本学が提示する4名で、かつ日本語ができる学生を派遣する。対象は学部生、院生とも可能である。ただし、学生派遣の際は教員が引率する規則となっているため、教員1名が同行する。その場合は、本学が招へいするのは小児看護学と公衆衛生看護学の教員としてはほしいとの要望があった。

渡航費は、国立モンゴル医科大学学生が自己負担できる可能性がある。

3. 今後のスケジュール

国立モンゴル医科大学とは2018年度（平成30年度）から学生・教員の交流を開始したいということで合意を得ている。2018年度（平成30年度）には本学が受け入れ、2019年度（平成31年度）には、本学学生を派遣する予定である。

プログラム実現のために早々に事業の実施計画に関するMOU（Memorandum of Understanding）を文書にて取り交わす必要がある。

VI 謝 辞

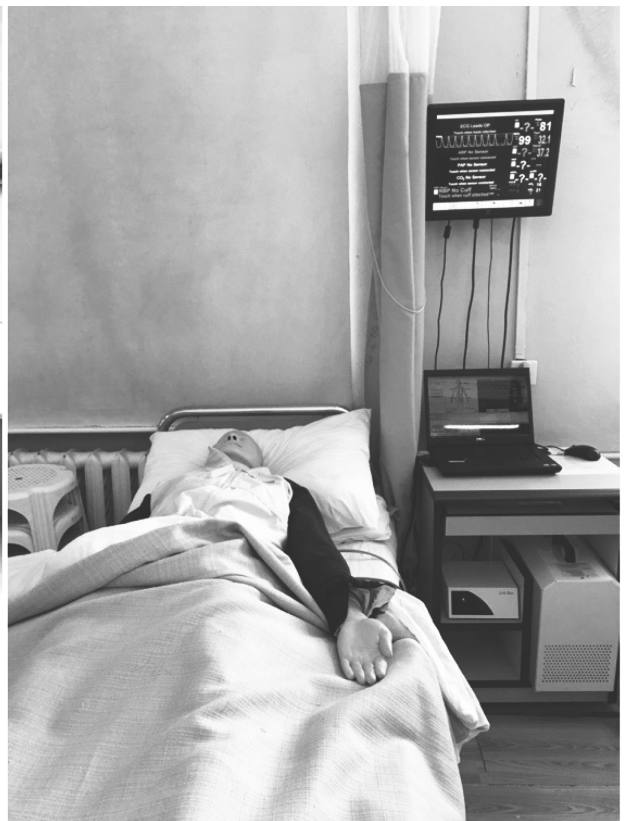
今回の視察及びプログラムの推進にあたっては、名古屋市立大学特別研究奨励費の助成を得て実施している。



国立モンゴル医科大学看護学部正門前にて
右から Dr. Delgermaa (精神看護学教員)
山口、鳶田、Ms. Bolormaa (モンゴル語通訳)



国立モンゴル医科大学の歴史



実習室の様子

本学が使用しているものと同様の最新のシミュレーターやモデル人形もある。しかし、ベビーモデルや助産のモデルは非常に古いものが使用されていた。

演習は、小グループに分かれて全員が経験できるように組まれている。



講義の様子

本学の紹介を学部生の講義の中で行った。

講義はモンゴル語の通訳を介して行ったが、学生の中には日本語が理解できる学生いた。日本に留学することに関心を寄せる学生が多数おり、具体的な留学に関する質問も活発に出た。



Maternity and Child Health Hospital
集中治療室



Maternity and Child Health Hospital
処置室



Maternity and Child Health Hospital
病室



Maternity and Child Health Hospital
リハビリテーションルーム